夢の狭間

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の狭間

【Ｎコード】
Ｎ３３２２Ｒ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
桜の咲く夢の中で少年と少女は出会った。
少年は人の夢の中を自由に行き来でき、過去に少女と出会う。
少年は少女に突然恋の告白をし、少女はそれから少年を忘れられなくなる。
そこから始まる、夢の中で起こる人々の葛藤やその戦い。

※サイト、ｄノベ転載

彼女は桜の夢を見る<1>

――――ここはどこだろう。

私は気づいたらここにいた。
辺りは真っ暗で何も見えないのに、満開の桜の木だけが見えた。
それ自身がぼんやりと光を放っているように見えた。
見慣れない場所なのに、不思議と居心地が良く、私はその場から動こうとする気が起きなかった。
ずっとこのままでも良いと思った。

「桜さん？」

だけど、その私を呼ぶ声が背後から聞こえた。
その声は優しく、深く私の中に入り込み、自然と従わせる力を持っていた。
私は振り返って声の主を確認した。
そこにいたのは、少し色素の薄い、私と同年代ぐらいの少年だった。
私はただ何を思うでもなく少年を見ていた。
ここにいると、頭がぼんやりとして、何かを考えることがなかった。
だから、突然現れた少年を不審に思うこともなかった。
少年は私に柔らかな笑みを浮かべたまま、私に近寄ってきて、座っている私に、しゃがんで目線を合わせた。

「こんにちは。俺のこと覚えてる？　前に会ったことあるんだけど」
言われたことを考えることはできた。
私は全く彼に見覚えがなく、首をかしげた。

彼はそれだけで私の答えを察したのか、その笑みが少し悲しげに揺れた。

「まぁ、しょうがないな……人は夢のことを忘れてしまうから」

「夢……？」

私はその少年に興味がわいて、思わず口が動いていた。

「そう、桜さんに前会ったのも夢の中だったし、今いるここも桜さんの夢の中なんだよ」

少年は何でもないことのように静かに返した。

「あなたは誰なの？」

即座に私は次の疑問を口にしていた。

少年はその質問を聞くと、少し驚いた顔を一瞬したが、すぐに嬉しそうな笑顔に変わった。

少年の不意な表情の変化に、私の心臓は飛び跳ねた。

「俺は圭吾けいご。夢を自由に行き来して、夢に囚われそうな人を助けているんだ」

圭吾と名乗った少年は、誇らしげに言った。

自分のやっていることに自信があるのがうかがえたが、どこか私に、子供が母親にするように自慢しているようにも聞こえた。

「圭吾さん。……そのあなたがなぜ私の夢に？」

私は一回彼の名前を口の中で転がし、次の疑問を口にした。

「本当は、危ない状態じゃない人の夢に入ることは禁止されてるんだけど、今日は桜さんに言いたいことがあって来たんだ」

圭吾は相変わらず笑みを浮かべていたが、緊張しているようで、彼の纏う空気が少し重くなった。

私もその空気を感じ取り、自然と緊張する。

圭吾は私の顔をじっと見て、私も圭吾の顔を見つめ返した。
「桜さんにとっては、いきなりのことで困るかもしれないけれど、どうか言うだけ言わせて」
圭吾はそこで一呼吸置いて、また私を見た。
彼の目は深く澄んでいて、吸い込まれそうな錯覚をおこした。
「桜さんが好きだ」
少しの間、時が止まった。
本当にいきなりで、私は驚いて固まってしまったのだ。
私が固まったままでいると、圭吾はまた少し切なげに笑顔を歪めた。
「夢の中でこんなことを言うのは卑怯かもしれないけれど、これはまた約束ごとで、夢で出会った人に現実で会ってはいけないことになってるんだ。だいたい、会おうとすることも難しいけど。でもこの気持ちをどうすることもできなかった。だから、せめて、言わせて。桜さんはまた前と同じように忘れてくれればいいから」
私は何か言わなければ、という思いにかられたが、何も言うことができず、急に視界が白くなり、意識が遠のいた。

そして、気づいた時、桜はベッドに寝ていた。
見慣れた自分の部屋の天井が見えた。
桜は、まだ覚めきっていない頭をなんとか起こした。
圭吾と出会った前の夢は忘れてしまったが、今度ははっきりと覚えていた。
不思議な気分を引きずったまま、桜は学校へと行った。

「おはよう、桜」
「おはよう」
桜のクラスの友人である香織が声をかけので、桜も挨拶を返す。
すると香織は、急に顔をにやつかせて桜に近寄ってきた。
「ねぇ、知ってる？　今日隣のクラスに転校生が来るんだって」
「ふーん。……九月だし、別に時期的には変ではないわよね」
桜は思ったことを口にすると、香織はつまらなさそうに顔を歪めた。
「もう、そうじゃなくてさ、どんな子なんだろーとか考えるのが普通でしょうがよぉ」
「そ、そうだね。どんな子だろうね」
香織は、桜の反応では満足してくれなかったようで、口を真っすぐに結んで桜を睨んでいた。
「……ホームルーム終わったら、様子見に行ってみようか」
桜は何とか香織の機嫌を取ろうとそう言った。
すると、香織は急に笑顔になった。
「……うん！」
瞬間桜は、香織にはめられたかもしれないと思った。

ホームルームが終わって、桜と香織は隣のクラスに向かった。
香織が、そのクラスの入り口近くにいる女子に話しかけ、何気ない風を装って教室を見回した。
話しかけた女子にも、誰が転校生かを聞いた。
どうやら窓際の席にいる茶髪の男子らしい。
桜と香織は転校生を遠目に見た。
そして桜はあることに気づき、目を見開いて、その場に固まってしまった。

その転校生が、夢で見た圭吾という少年に似ていたからだ。

RAN　＊＊＊2006／9／8＊＊＊

彼女は桜の夢を見る＜2＞

「圭吾！」
桜は思わず声を出していた。
クラス中の視線が桜に集中するが、桜は構わずに転校生の少年に走り寄った。
その少年は、いきなり呼びかけられ、驚いて桜を見ていた。
「あなたがなんでここにいるの？」
桜は圭吾の肩をつかみ、圭吾を見下ろす形になって詰め寄る。
だが、少年はただ目を見開いて桜を見上げていた。
そこで桜は我に返り、ゆっくりと少年の肩から手を離し、辺りを見回した。
桜は自分のしたことを急に自覚し、顔に熱を感じた。
居たたまれなくなり、すぐに少年から離れ、教室から出て行った。

「桜！」
桜が教室に戻って、少し後に、香織が来た。
自分の机に座っていた桜は、香織の方をやや虚ろな顔で向いた。
「……どうしたの？」
香織が心配そうに、机の側屈み、桜に近づいて聞いた。
その声は、やや低かった。
「……夢で見た人に似ていたの」
桜が、顔をうつむかせて、小さく呟いた。
その声こそ、夢を見ているような細さだった。
香織は不審そうに眉根を寄せて、さらに聞いた。

「どういうこと？」
「……私、昨日夢を見たの。満開の桜が咲いていて……これはよく見るの……だけど、昨日は、男の子が現れたの。あの転校生にとても似てる。ただ、彼はもっと色が薄くて……儚げな感じだった。それで……」
桜は、ここで言おうかどうしようか迷う素振りを見せた。
言葉を詰まらせ、視線をさまよわせる。
「何？」
香織はそれに気づき、先を促すように、強く言った。
桜は意を決して、口を開いた。
「……その男の子、圭吾と名乗ったのだけど……好きだって、言われたの」
「……」
香織は聞いた瞬間に目を見開いて、しばし硬直してしまった。
「え……？」
そして、思わず聞き返してしまった。
「……言われたの」
桜は言いにくそうに、最後の部分だけ繰り返した。
「……つまり、告白されたの」
「そう……」
香織の反応に、やはりこんな話ばかげている、と思い、桜はため息をついた。
香織もそれで桜が余計に落ち込んでしまったことを察し、慌てて言葉を発した。
「いや、確かに聞いたことない不思議な話だったから驚いちゃったけど、私だって不思議なもの見たりしてるんだから、信じないって訳じゃないのよ。そこだけは誤解しないで」
「……見てるの？」
桜は、香織の「不思議なものを見たりしてる」という言葉にひっかかりを覚えて、聞き返した。

香織とは高校からの付き合いで、そういう話をあまり聞いたことがなかったのだ。
彼女に霊感みたいなものがある、という話も聞いたことがなかった。
つい興味を覚えて聞いてしまっていた。

すると、香織は明らかに失敗したと思ったのか、片方の眉だけをひそめ、口の端を下げた。
「……まぁ、そのことについては後で話すから、とりあえず今は目の前の問題に集中しよう」
桜は渋い表情を一瞬だけ見せたが、すぐに笑顔になった。
だが、笑顔といっても、苦笑いというものに近かったが。
「そうね。後でじっくり聞かせてもらえばいいわね」
桜がやや刺々しく、香織の話題転換にのった。
香織は苦笑いをそのまま続けながらも、どこか安心しているようだった。

「で、それなら、香織はどう思っているの？」
ここで、香織は笑みを浮かべるのをやめた。
急に彼女の声が引き締まる。
「そう、逆に不思議なものを割と日常的に見ていると、聞いたことのないものに出会うと、ひどく混乱するのよね。人の夢に入るなんていう能力、確かにあったらよさそうだな、と思うこともあるけど、実際にそういうことをできる人っていうのは聞いたことがないし。だから、あの転校生とその桜が会った『圭吾』っていう人が同一人物か、というのもわからないわ。でも見事なことに、転校生の名前も圭吾というのよ。彼のフルネームは里見さとみ圭吾っていうの」
「……里見圭吾……」
桜は、口の中で転がすようにその名前を呟いた。
何だか不思議と、甘い飴をなめているような気分になった。

「もし無関係だった場合が困るだろうから、まず夢でその『圭吾』という人がまた接触してくるのを待った方がいいじゃないかしら。その時に、また色々話を聞いてみればいいんじゃない？」
「また会いに、来るかしら？」
桜の声の調子は、不安げだった。
「きっと来るわ。その人は、前に会ったことがある、と言ったのよね。もう一度会いに来た、ということは、やはり桜に何かしらの執着を覚えているからよ。そういう執着はなかなか薄れるものじゃないわ。いつになるかわからないけど、もう一度来るはずよ」
「でも、彼は、一度会ったことある人と夢で会うのはいけないことだって言ってた」
「それなら、なおさらよ。いけないことだと知りながら会いに来るなんて、よほど気持ちが強い証拠だもの。一度破ってしまったら、二度目なんて容易いわよ」
「……そういうものかな……」
「まぁ、待ってみればいいわよ」
「……転校生の圭吾君に、話しかけるのは、まずいと思う……？」
桜が不安そうに香織を見上げて聞いた。
「……桜がしたいなら、すればいいと思うよ。さっきのまんまってのは、やっぱり向こうの気になるだろうしね」
ここで、香織は笑みを浮かべた。
どこかからかうような、悪戯っぽい笑みだった。
桜も何だかおかしくなり、笑みを浮かべた。

「ありがと、香織」
「いえいえ」

彼女は桜の夢を見る＜3＞

そうして、放課後になった。
香織は、家の用事と言って、先に帰っていた。
桜は気になることがあり、隣のクラスに向かっていた。

そして、隣のクラスに近づくと、自然と足をゆっくりと進めていた。
なぜだかわからないが、そうするのが良いように思えたのだ。
そして、こっそりと教室の中を覗く。
ホームルームが終わった直後だったようで、生徒達が帰るところだった。
その中に、圭吾もいた。

――よかった、まだ帰っていない。

桜は、そこで小さくほっと息をついた。
しかし、ここで教室の中に入って声をかけるのはまずいだろう。
先ほどのことは、クラスの皆に見られている。
今入っていけば、また皆の視線を浴びてしまう。
それは恐らくあの少年にとって気分の良いものではないだろうし、自分もそれは同じだった。

そこで桜は、いるのを確認すると、考え始めた。
どこで圭吾という少年に話しかけるべきか。
玄関――は、この時間ではやはり人目につく。
校門――も、同じ理由で人目につきそうだ。
でも、校門から少し出た所なら、気づかれにくいのではないだろうか。

しかし、それには圭吾を少しの間追跡しなければならない。
何だか悪いことを企んでるみたいだ、と桜は少し嫌な気分になった。
だが、やはり気になるものは気になる。
ここは潔くあきらめ、桜は圭吾の追跡をすることにした。

しかし、追跡すると決めたはいいものの、どうしたら気づかれずにつけることができるのだろう。
実は、そこが一番の問題だった。
学校の中では、隠れる所がない。
しかし、外で待ち伏せていては、もしかすると逃してしまう可能性もある。
やはりここは、学校の中で何とかやるしかない。
桜は、だんだんと妙な使命感を感じていた。

そして、また中を覗き込もうと、教室のドアに近づいた時だった。

「うわ！」

桜が、顔だけ教室の扉の部分に近づけた瞬間、教室のドアが開き、なんとそこには、桜が追跡しようとしていた人物――里見圭吾がいた。
危うくぶつかりそうになったのを、互いに後ろに退いて避けた。

「ご、ごめんなさい……」
桜が慌てて、頭を下げた。
「い、いえ……こ、こちらこそ……」
圭吾も同じように頭を下げる。
そして、教室から出ていこうとした。

しかし、ここで行かせてしまっては、後ろを歩くのがかなり不自然になってしまう。
もう桜は、今まで考えていた計画は全てあきらめることにした。

「さ、里見君！」
名前を呼ばれて、圭吾は見た目にもわかるぐらい大きく肩を揺らして立ち止まった。
そして、桜に向けていた背中を、ゆっくりと翻す。

「少し、お話する時間を頂いてもいいですか」
桜は、できるだけ不自然にならないように、笑顔で優しく話しかけた。
「……い、いいですけど……」
圭吾は、何だか緊張しているようで、どもりながらも返事をした。
「ありがとう。……えぇと、こんな所で呼び止めてしまってごめんなさい。急いで、外に出ましょうか」
桜が、苦笑いを浮かべて言った。
「え、えぇ……」
圭吾もこれの意味を察し、苦笑いを浮かべ、同意した。

そして、二人は、周りの視線を痛く感じながらも、学校を出て行った。

彼女は桜の夢を見る＜４＞

校門の外に一歩出て、とりあえず二人は痛い視線から解放され、同時にため息をついた。
それをお互いに聞き取り、顔を見合わせて、また苦笑いを浮かべる。

「里見さんは、家はどちらの方なんですか？」
「こっちです」
圭吾が指した方角は、桜の家とは反対だった。
ここで反対だと言えば、相手に気を遣わせることになる。
「奇遇ですね。私もなんです」
桜はあえて、嘘をつくことにした。
「途中まででも、一緒に歩きながら、お話しましょうか」
そう言うと、桜は歩き出した。
圭吾も、それについて歩き出す。
圭吾は気後れしているのか、桜の前を歩こうとしないので、桜が足を合わせて、圭吾と並ぶように歩いた。
「あの、さっきはすみません。いきなり……その、肩をつかんだりなんかして……」
桜はとりあえず、まず言いたかったことを言うことにした。
「あ、いいえ、大丈夫です」
圭吾は、笑みを浮かべて返事をした。
だが、その視線は桜を見ておらず、どこかうつむき加減で、その笑みもどこか虚ろで、困っているようにも見えた。
桜より背が高いのに、どうも小さく見えた。
桜は、その様子がとても気がかりだった。
「あの、転校なされて早々、あんな目立つようなことをしてすみません。もしそのせいでご不都合など起こりましたら、教えてくださ

い。できる限り、ご協力しますから」
圭吾は視線を合わせなかったが、桜は圭吾を見て言った。
「……いえ、本当に、大丈夫ですから。お気になさらず」
返事の前の間が気になった。
「それなら、いっそのこと何もしないでくれ」という声が桜には聞こえた気がした。
本当ならそうした方がいいのかもしれない。
だが、桜にはそれができなかった。
どうしても、この圭吾という少年と関わりを持っていたかった。
だから、圭吾が悲しげな顔をするたびに、自分のエゴのせいで彼が苦しんでいるのかと思うと、罪悪感に胸が痛んだ。
だが、どうしてか譲れないものが、桜にはあった。
悲しい気持ちになりつつあったが、それでも桜は続けた。
しかし自然と、その声音は重く沈んでいた。

「里見さんは、私なんかに話しかけられて、ご迷惑でしょう。ですが、自分でもわからないんですが、どうしても里見さんのことが気になってしまって……」
自分で言って、これじゃあ愛の告白をしているみたいだ、と自嘲的な気分になった。
男にこびへつらう、売春婦みたいだ、と嫌になった。
だが、そう思ったことを表してしまえば、本当に自分を貶めることになる。
桜は、その気持ちを奥へと押しやった。
「ごめんなさい……」
しかし、言葉が続かず、これを言って、桜の言葉は途切れた。
そして、数瞬の沈黙。

「……桜さんは、謝らないでいいんです」
相変わらずうつむいていて、視線は桜を見ていなかったが、その

声はしっかりしたものになっていた。
桜もうつむきがちになっていたが、その言葉を聞いて、圭吾を見る。
すると、また圭吾はわかるぐらいに肩を震わせた。
「あ、えと、名前は、その、お友達がそう呼んでいるのを聞いたので。そ、その、不快に思われたら、す、すみません……」
また、先ほどの調子に声が戻ってしまった。
その様子に、桜は自然と笑みが出た。
「いえ、ぜひそう呼んでください。あと敬語も、必要ありませんから」
「それなら、桜さんも、敬語はやめてください。あと、同級生なんですから、僕のことも、『さん』づけじゃなくて、『君』って……呼んで……よ」
圭吾が言いにくそうに言った。
だが、その顔には、照れたような、それでも嬉しそうな笑みが浮かんでいた。
「……圭吾君、と呼んでも、いい……かな？」
桜も、同じように言いにくそうに聞き返した。
二人の顔には、それぞれ笑顔が浮かんでいた。

「僕、本当は桜さんに声かけてもらって、嬉しかった。桜さんみたいな、きれいな人に」
「圭吾君は、意外と口が上手なのね」
桜は、冗談のように笑った。
だが圭吾の笑顔は、逆に悲しそうに揺れた。
桜は、それには気づいていなかった。
「お世辞じゃあ、ないから。僕は、本当に嬉しかったんだよ」
圭吾の言葉の響きに、何かひっかかるものを感じて、桜は圭吾の顔を見た。
今度は、しっかりと視線が合った。

圭吾も、桜を見ていたからだ。
彼の顔は、優しげな笑顔だった。
桜の中で、その顔と、夢の中で会った『圭吾』の面影が重なった。
そして、一瞬言葉を出すことができず、圭吾の顔を見つめてしまった。

「僕は家、こっちなんだけど、桜さんは？」
しかし、視線をはずしたのは圭吾だった。
問われて、桜も慌てて返事を返す。
そういえば、先ほどからそれなりの距離を歩いただろう。
そろそろ、折り返して戻るべき頃合かもしれない。
「あ、私はあっち。それじゃあ、ここでお別れね。また、学校で」
桜は、片手を肩まであげた。
「うん。今日は、ありがとう」
圭吾は笑顔でそう言うと、帰り道へと向かった。

桜は、しばらくその背を見ていた。
何だか、視線をはずすのが惜しかったのだ。
圭吾が少し行った先の角を曲がると、桜も、来た道を折り返した。

彼女は桜の夢を見る＜5＞

そして、桜は家に帰った。
家の扉を開けても、中は薄暗いままだ。
桜の母親は、夜から出る仕事をしていた。
この時間は、ちょうど出勤していったばかりだろう。
夜からの仕事など、だいたい限られてくる。
桜は、小さい頃からその仕事をしている母親に嫌悪感を覚えていた。
自分を削って、売っているように見えたからだ。

家の中に入り、隣にあるキッチンのテーブルの上を見た。
そこには、皿がいくつか並び、晩御飯が用意されていた。
メモも、いつものように残されている。

――「温めて、食べて」、と。

桜は、そのメモを見ると、丸めてゴミ箱に捨てた。
そして、皿を取ると、それをレンジにかけていく。
そうすると、きちんとしたご飯ができあがっていた。
家にいることが少ない人ではあったが、妙にこういうところは律儀だった。
もしかしたら、あまり一緒にいれない桜への負い目があるかもしれない、とも考えられる。
だが、桜はその考えは否定している。
あんな図太い神経の人が、そんな繊細な心を持ち合わせているはずがない。
桜の母親に対する評価は、そういうものだった。

そして、食事を済ませ、片付けも済ませた。
風呂をわかし、その日の疲れを取る。
そして、部屋に入って宿題をこなし、明日の授業道具を揃える。
あとは、寝るだけ。
今日もいつもどおりに一日を終えた。
違うのは、圭吾という少年に会ったこと。

いつもと違うのは、今、眠りにつくこの瞬間からかもしれない。
桜は緊張しながら、布団にはいった。
しかし、そのような状態で眠れるはずもなく、桜は自分が単純だなぁ、と思わず苦笑をもらしてしまった。
こういう時は、逆にあまり期待しない方がいいのだろう。
桜は、気を落ち着けるために、別なことを考えることにした。
どうでもいいこと。明日は学校では何があったっけ、とか。
しなくていい考えを、排除することを、桜は昔から得意としていた。
だからこそ、今まで母親とも何とかやってきた。

そうしているうちに、桜はいつのまにか眠りに落ちていた。

次に気づいた時には、あの桜の下にいた。
いつも夢で見る、桜。
いつも満開で、でもいつも、花吹雪という言葉を表しているかのように花びらが散っていた。
その桜の木に、桜は寄りかかっていた。
目を開くと、その桜以外は相変わらず真っ暗だった。
真っ暗だが、不思議と落ち着く空間だった。

桜は、背中に感じていた桜の木の根に手を添わせた。
そして、ゆっくりとさする。それも、桜を落ち着かせることの一つだった。
夢だとわかっているのに、感覚はやけにリアルだった。
桜の匂いはとても強く感じるし、桜の花を舞わせている空気の流れも肌で感じた。
そして何より、この木に触れている感覚。
ひんやりとしているのに、不思議と冷たくは感じなかった。
――このまま、お前と一緒にいられれば、いいのにね。

「それはいけない」
桜がそう思うと、声がかかった。
桜は突然の声に驚いて、桜の木から少し背を離し、少し傾いていた顔を、まっすぐにして、声のした方を向いた。

するとそこには、『圭吾』がいた。

「圭吾……？」
桜が名前を呼ぶと、圭吾は一瞬驚いたような顔をしたが、次の瞬間、とても嬉しそうな顔をした。
それはまるで、花が開くように、一気に華やかに。
「俺のこと、覚えててくれたの？」
どうやら、声の調子があまり変わらないことから、何とか感情を抑えようとしているようだが、顔が行動に伴っていなかった。
桜はそれが何だかおかしくて、思わず笑ってしまった。
「そうよ。前会った時のことは忘れてしまったのに、昨日のことはとてもよく覚えているの。不思議ね」

「ねぇ、桜さん。それなら、俺は君とお話をしたいんだ。そこから、

こっちに来てくれないかな」
圭吾はそう言うと、自分の隣を指し示した。
桜は、それに何だか妙な違和感を覚えた。
圭吾の笑顔が、桜の知る大人達が、子供をなだめる時に、特にその言っていることの裏に深い意味を持っている時に見せる笑顔に見えたのだ。
それは、良い結果の時も、悪い結果の時もあった。
その笑顔を、桜と対して年の違わない圭吾がしているのが、桜には不自然でならなかった。
桜の顔は、急に引き締まった。

「なぜ」
桜の声が鋭くなり、急激に温度が冷えていくのを感じ取ったのか、圭吾も、笑顔は保ったものの、まとう空気が変わった。
「それなら、貴方はなぜその理由を問う」
「私が質問しているの」
「俺が答える理由がどこにある？」
桜は少しイラついた。
だが、逆に圭吾は余裕のある笑顔を見せている。
「今日、学校であなたにとてもよく似た男の子が転校してきたの。名前も、同じみたい。でも、彼は貴方とは顔は似ていても、性格が違うみたいね」
桜は話題を変えることにした。
精一杯嫌味たらしく、言った。
すると、圭吾の顔から笑顔が消えた。

「何が言いたいんだ」
「学校で会った圭吾君は優しそうだったけど、あなたは意地悪な人なのね」
桜の言葉に、圭吾は今度は皮肉っぽく鼻で笑った。

「桜さんが会った、その圭吾とかいうヤツも、裏ではどう考えてるかわかったものじゃない」
「でも、少なくともそれを表に出してないのだから、問題ないわ。あなたは、見た目は儚げで弱そうだけど、まるで汚い大人みたいな顔をするのね」
「……」
圭吾の顔から、表情がなくなった。
彼はうつむいて、片手で頭を抱え込む仕草をした。
その仕草からさえも、温度を感じられない。
桜は、それがとても奇妙に思えて、圭吾が不気味に感じられた。
何か思えば、例えば怒りならやはり何か熱いものを感じる。
悲しさにも、感じる温度がある。雨に打たれたような、冷えていく感覚。
だが、彼には何も感じられなかった。
怒っているのか、悲しいのか……何もわからない。
ましてや、この状況で嬉しいなどと感じることはないだろう。
「やはり、貴方に会ったのは間違いだったようだ」

そして、次の瞬間、桜の視界は暗転した。
気づくと、また朝の光の入る部屋の天井が視界に入った。
桜は、最後の圭吾の悲しげな声が気がかりだった。

ＲＡＮ　＊＊＊２００６／１２／１７＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3322r/

夢の狭間

2011年7月5日03時21分発行